

大江健三郎の「近代化」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/3586

大江健三郎の「近代化」

——「鉄道弘済会の娘たち」と女性表象——

團野光晴

1 「世界」デビュー作としての「鉄道弘済会の娘たち」

大江健三郎「鉄道弘済会の娘たち」は「世界」一九六一年三月号に発表され、『厳肅な綱渡り』（一九六五年三月文芸春秋新社刊）第五部に「ブラットフォームの娘たち——鉄道弘済会」と改題して収録された（以下本論ではタイトル・テキストとも初出のものを採用し、適宜「娘たち」と略称する）。大江の作家生活四年目のルポルタージュである。

「娘たち」は従来の大江論では殆ど顧みられなかったが、大江自身はこれを中心に重視している。「厳肅な綱渡り」では収録テキスト中大江が重要とみなすものの表題にアスタリスクを付すことが「この本全体のための最初のノート」で述べられるが、「娘たち」にはこれが付く。またそのダイジェスト版である講談社文芸文庫版『厳肅な綱渡り』（九一年一〇月）では、大江自身収録テキスト選定にたずさわったことが「文芸文庫版」のためのノート」に明記され

ているが、「娘たち」はこれにもその全文が収録された。さらに「世界」九五年一月号の安江良介との対談「初心から逃れられずにきた」で大江は「そのころ一つだけ、自分がこれはうまく書けたのではないかと思った」と「娘たち」を回想している。発表以来このルポが大江にとって長く意味を持ったことが伺われる。その意味の一つとして、「娘たち」が大江の実質的な「世界」デビュー作であることが考えられる。

大江の実際の「世界」初登場は六〇年三月号掲載の「怒れる若者たち」ノート」であるが、これはその本文で触れられているように、当時「怒れる若者たち」と称された大江を含む若い作家たちを批判した座談会「混沌の中の未来像——若い世代の貌——」（「世界」五九年一二月号。江藤淳・堀田善衛・竹内好・開高健）への回答という性格を持つ。しかもここで、「自分の内面のことをもつぱら問題にしている（竹内）」「他存在をつかまえることのむずかしさからくるいらだち（堀田）」「すべての外界を拒みたいという気持がある（開高）」「現実や他者を拒んで自分だけの関心の方向に進んでい

うとしている」（江藤）といったこの座談会での批判を超える能動的意見が展開されているとは言い難い。

ここで大江は自分たち若い作家を「その論理が演繹的のにおこなわれる性格をもっており、その結果、現実に着することがなくなるくらいがある」として「混沌の中の未来像」での批判を受け入れつつ、「ぼくは現実をみきわめ、それを芸術化する新しいリアリズムを達成したいと考えている」と述べる。だが続いて自分たち「戦後世代」が「現実・他者をえがきだすリアリズムの達成」に「不成功に終」わり続け、「自己完結的」「自己閉鎖的」になるのは、「戦後世代の思想的な指導者がいない」ためとするような論理が展開し、その上で「戦後世代の思想的指導者」となるべき「戦中世代」知識人の「未来像の欠如」が批判されるのである。これは、「現実・他者」を描く自らの「リアリズム」成立のためには「現実・他者」を評価し対象化する基準・立脚点としての「未来像」が必要であることを述べたものと言える。しかしその「未来像」を自ら打ち出せないまま、「未来像」を欠いて「戦後世代の思想的指導者」になろうとしない「戦中世代」を責めてしまう姿勢は、「酷評すれば、甘えている」というところがあるんじゃないかな」という「混沌の中の未来像」での竹内好の批判でひとまず言い尽くされてしまう。結局ここで大江は「混沌の中の未来像」での批判を乗り越え得ず、この座談会での議論の対象としての受け身の位置にとどまり、「世界」執筆者としての能動的主体を確立出来なかったと言える。

その後一年間の「世界」寄稿空白期間において「娘たち」は発表されるわけだが、ここでは「世界」の先行テクストへの回答という

体裁は採られず、大江が自ら取材し見解を示すというスタイルが備わっている。結末には「まず自分が幸福をそこなわれることなく働ける職場をつくりだすことが第一義の問題である」との積極的提案が打ち出されており、本編ではこれを「未来像」とする形で、鉄道弘済会の女性労働者の「現実」がこれとはほど遠いイメージで統一され描き出される。大江は『怒れる若者たち』ノート」以前、「現実の停滞と文学」において「われわれ日本の若い作家は、人間としての若い労働者をえがきだす能力を自分のものとする必要がある」と述べていたが、学生からそのまま作家となった大江にとつての「他者」が労働者であると考えたと、ここで「現実・他者をえがきだす」大江の「新しいリアリズム」がルポという形でひとまず具体的達成を見たことがわかる。「娘たち」によつて「混沌の中の未来像」での批判は乗り越えられ、新しい「世界」執筆者としての大江の能動的主体が確立したと言つてよい。

実際これを機に大江は、これ以前の一年間の寄稿空白期間とは対照的に、六一年に「娘たち」以外に二本（六月号「アジア・アフリカ人間の会議」七月号「強権に確執をかもす志」、翌六二年に三本（三月号「サルトルの肖像」・一〇月号「今日の軍港——基地横須賀」・一二月号「朝鮮人と日本人の authentic」）の文章を「世界」に寄せる。翌六三年の寄稿は一〇月号の「広島一九六三年夏」（六五年六月刊の岩波新書『ヒロシマ・ノート』に第一章として収録）のみだが、これを布石として翌六四年一〇月号から六五年三月号にかけ大江は代表作「ヒロシマ・ノート」を連載、六六年一月号の「持続する志」で「寄稿者の末席につらなることを誇りとする」と「世

「界」執筆者としての自覚を表明することになる。以後「アメリカ旅行者の夢」「沖繩ノート」³「状況へ」などの連載を含め大江はたびたび「世界」に寄稿、「世界」の有力な執筆者となつて行く。

周知の如く「世界」は「革新的という定評」⁵を持つ戦後の総合雑誌である。「世界」執筆者としての主体確立は「革新的」言説をリードする論客としての主体確立をも意味すると言え、「娘たち」は大江にとってそのためのスプリングボードとなつた形である。

2 「白衣のピケ」の引用

先述したように、「娘たち」は鉄道弘済会売店の若い女性販売員の労働実態にスポットを当てたルポである。ところで筆者の調査では、三池争議や中小企業の待遇改善、社会党の構造改革論など、多くの労働問題が存した当時において、鉄道弘済会自体がことさら話題となつた形跡は見あたらない。従つてこのルポの画期的な意味は、鉄道弘済会の労働実態を新たに問題化したところにあると見られる。実際本文中に「ジャーナリズムは弘済会を伏魔殿だなどとしそひそいつてはいるものの、それを雑誌や新聞で堂どうと告発することはまったくできないじゃないか」と「経営陣の人物」が豪語する箇所が出てくるのである。だがそれに当たつて特に若い女性販売員に焦点を絞ることは当時いかなる効果を持つことになるのか。ここで注目されるのは、劣悪な待遇に甘んじている女性販売員たちに対し「なぜ彼女らはそれに抗議しないのか？」と本文中で疑問が述べられることである。この表現は「娘たち」発表の直前に世間の注目を

集めた、劣悪な待遇に抗議する若い女性労働者たちの存在を直ちに想起させる。病院ストにおける看護婦（女性看護師。以下当時の呼称に倣い看護婦とする）がそれである。

六〇年二月より散発していたこの時期の病院ストは、同年一二月ごろ全国的に本格化し、翌年五月ごろ解決を見る。「読売新聞」「毎日新聞」「朝日新聞」三紙においては東京女子医大・東邦大学付属病院の賃上げストが起つた六〇年一〇月下旬ごろからこれを論評する記載が見られ、翌一月上旬をピークとして年末にかけ病院ストの記事が連日のごとく紙面をにぎわすようになり、社説・コラム・特集記事などでの論評もしばしば行われるようになる。世間からの反響も大きく、これに関する投書が新聞・週刊誌等で数多く見られ、また一二月三日付「読売」掲載の読者投票による「六〇年の日本一〇大ニュース」では、浅沼稻次郎社会党委員長刺殺・安保闘争・三池争議などの歴史的事件とともに、病院ストが選外とはいえ一五位にノミネートされていたりするのである。

この一連の病院スト報道で一番注目されたのは看護婦であった。このことは六〇年一月の「読売」「毎日」「朝日」各紙面に、病院前でピケを張る白衣の看護婦を捉えた写真が数多く見られることでまず確認される。病院スト報道ラッシュの口火を切つた六〇年一月一日の東京医務連傘下七病院「斉スト」の報道では、読・毎・朝各紙当日夕刊がいずれもピケを張る（「毎日」はジクザク行進する）白衣の看護婦たちの写真を掲載している。筆者の調査では、これを含め以後一月中旬に病院スト関連の記事に添えられた写真のうち、白衣の看護婦のピケを捉えたものは、小さく写っているものも含め「読

「売」が七件中五件（一・八・一四・二五）日各夕刊及び二八日、「毎日」が七件中六件（一・八・一四・一九・二五）日各夕刊、「朝日」が六件中五件（一・八・一四・一九・二五）日各夕刊」となっている。これらはいずれも看護婦を行動する組織集団として捉える傾向が支配的で、専ら一人の看護婦をクローズアップした「朝日」一月一九日夕刊の写真にも「ピケの看護婦さんに説得される通院患者」とこれを組織集団の一員として規定するキャプションがつく。

このような看護婦集団は「白衣のピケ」「白いピケ」などと称され、記事の見出しにもなった。「白衣のピケ」は「朝日」一月一日夕刊、「白いピケ」は「毎日」一〇月十八日夕刊及び「読売」一月八日夕刊に用例がある。ここから、一連の報道で看護婦が集団として「白衣のピケ」と類型化され、病院ストの象徴とされたことがわかる。

この病院ストに対し「読売」（二月九日）「毎日」（同四日）「朝日」（同六日）各紙の社説は、ストの原因として病院における「前近代化」（「読売」）「封建的」（「毎日」）「徒弟的」（「朝日」）な労使関係が看護婦に犠牲を強いていることを挙げ、スト解決のためには病院の「近代化」が必要の旨を共通して述べている。このように一義的には最低賃金の保証と賃上げを求めたこれら一連の病院ストを、病院の「封建的」体質の「近代化」を目指す闘いと見なす論調が当時のマスコミには存したのであり、その意味で「白衣のピケ」はまた「近代化」の象徴ともされていたのである。「朝日」六〇年一月二四日夕刊「今日の問題 病院スト」で「戦前の病院に特有な封建的な人間関係も、まだ残っているようだが」とあるように、当時

「封建的」とは否定すべき「戦前」的なことであり、これに対する「近代化」は（戦後）という時代の正義であった。その象徴としての「白衣のピケ」のインパクトの強烈さは、「もともと医者と看護婦にストはない、といわれて来た」（「読売」六〇年一月二日）「編集手帳」「病院の入り口で肩を組みピケを張っているのは大半は若い看護婦さん——白衣の天使」といわれた彼女たちが、なぜストをやるようになったのか」（「毎日」同一月五日夕刊「病院ストの背景」）などの論調から伺われるように、奉仕的な「聖職」イメージの強い看護婦が労働者としての権利を求めて行動を起こした点に特にあつたと言える。「三十六時間労働」や低賃金・非民主的人間関係など、看護婦の劣悪な労働実態が暴露され、これを道徳的に美化し正当化する「ナイチンゲール精神」を「封建的」と断ずる批判や、「ナイチンゲール」をもじり揶揄する「ない賃ガール」という言葉がしばしば見受けられる病院スト報道の過熱ぶりは、ここから説明されよう。

この「白衣のピケ」は、同じ女性労働者である保母の劣悪な待遇が問題化される際引用されることにもなる。「週刊朝日」六〇年一月二五日号は「保母さんもストライキ？」と題して「こんな調子では、ことしの病院ストに次いで、明年は、保母さんたちの争議が起るのではないかと心配されている」と述べている。また「読売」六一年一月九日付は「保母さんは訴える」と題して「人権ストと騒がれた看護婦さんの実体は、五年勤めても八千円」ですが、私たちがはもつとひどい」という保母の談話を載せている。このように「白衣のピケ」は、今まで顧みられなかつた女性労働者の実態を新たに

「封建的」として糾弾する際に参照され、「近代化」促進を提唱する言説の連鎖反応的形成を惹起するほどになるまでのイメージとして一般化したのである。

「娘たち」もまたこの連鎖反応の一環と見ることが出来る。「娘たち」は行アキによつて六つに章立てされているが、その第一章に視点人物「私」との対話で「Q 駅の娘さん」が「明け（傍点原文）は自分の時間だから、帰ろうとしたんだけど、主任さんが、おまえコウサイカイじゃないのか、というからね」と発言する箇所がある。鉄道弘済会の性格が当時どれ程一般に知られていたかは不明だが、「娘たち」にあるように同会が主に国鉄駅売店販売事業を通じて社会福祉を行う財団法人であることを考慮すると、「おまえコウサイカイじゃないのか」という言葉は看護婦に対する「ナイチンゲール精神」と同様、従業員を道義で縛る効果を持つものであることを思わせる。続いて紹介される「二徹」「四徹」という勤務体制は看護婦の「三十六時間労働」を想起させ、「もつとも弘済会の造るものでろくなものはない、と論語（傍点原文）にあるじゃない？」「プリンス・ホテル品川別館ね」という「Q 駅の娘さん」の皮肉を込めた冗談は「ない賃ガール」を連想させる。また第二章で女性従業員飯泊所の劣悪さが紹介されるが、病院スト報道でも看護婦寮や病院宿直室の劣悪さは指摘されていた（サンデー毎日「六〇年一月二〇日号」「天使たちの人間宣言」；週刊朝日「同一二月二〇日号」；白衣の天使」というけれど；読売新聞「同一一月二六日」「なぜ起こった病院スト」；朝日新聞「同一二月一日夕刊」「よい看護婦さん」への条件）。「娘たち」の冒頭二章は明らかに同時代読者に「白衣

のピケ」を連想させるのであり、特に看護婦と同じ女性労働者に焦点が絞られていることで、その効果は確実なものになっていると言える。広く一般化した「白衣のピケ」のイメージを参照項として事実上引用しているところに、弘済会女性販売員の実態を「封建的」とし、その「近代化」を訴える正義を語ろうとするこのルポの基本的構図が立ち上がっている。

3 「私」による「白衣のピケ」との差異化

しかし弘済会女性販売員たちが「白衣のピケ」と異なるのは、劣悪な労働条件に対して彼女らが抗議の声を上げないことである。両者の差異は第二章の終わり近くで、それまで取材してきた「私」が「それにしても弘済会の労働者たちは、なぜこのような労働条件を耐えしんでいるのか？」「なぜ彼女らはそれに抗議しないのか？」と自問することによつて強調される。しかし彼女らが現状に不満を持たないわけではない。この自問の後すぐさま「ぼく」は「B 駅の売店の娘」が言った「みんな弘済会をやめたがっています。弘済会の仕事に希望もっていません」という言葉を「くりかえし思いうかべ」るのである。

ところで、前掲の保母は看護婦の例を引用し、これよりも「私たちちもつとひどい」と自らの境遇を断ずることで抗議の声を新聞に載せていた。「白衣のピケ」によつて一般に知られた看護婦の「封建的」現状との比較において「もつとひどい」とこれと差異化されることで、今まで顧みられなかった保母の境遇は看護婦のケースに

も増して糾弾されるべき新事実としての情報価値を持つのである。

同様に、「白衣のピケ」のイメージと弘済会女性販売員との差異を強調する「なぜ彼女たちはそれに抗議しないのか？」という「私」の問いは、「みんな弘済会をやめたがついています」という「B駅の売店の娘」の言葉と相まって、不満を抱きながら抗議しない彼女たちが、ともかくストによって抗議の声を公にすることができた看護婦よりも「もつとひどい」、抗議の声を上げることすら許されぬ「封建的」境遇にあることを同時代の読者に予感させるだろう。引用した「白衣のピケ」のイメージとの差異化を図ることで、それにも増して糾弾されるべき新事実として弘済会女性販売員の実態を描き出していくというこのルポの構造が、ここに端的に現れている。

その差異化を具体的に実践するための仕掛けとなっているのが、「私」という一人称の視点人物の登場である。「やつれているのは過労と胃の病気のせいだろう、しかし明るい感じだった」という相手の印象の詳細な記述や、「もう、(傍点原文)にくるわ」「睨まれたっからね」という俗語の使用による相手の声の描写を伴ってその一回的偶然性の持つ具体性を強調される「Q駅の娘さん」と「私」との対話は、ひとまず視点人物「私」の見聞や実感が時間的・空間的に限定された特殊なものであることを印象づける。しかしこの対話での「Q駅の娘さん」の証言内容が「白衣のピケ」から了解可能なものであることにより、ここで特殊限定的な「私」の見聞は一般性を保証されていた。さらに第二章で「私」は仮泊所の印象を「これは人間のな話じゃない、と私は思った。清潔だがジメジメしている、これもやはり人間の家庭の一般とは感覚がちがう、それに凄く寒い」

とかなり実感的・主観的に述べるが、これもまた「私」の仮泊所での見聞が「白衣のピケ」を想起させるものであることでその一般性が納得されるものになっていた。冒頭二章でのこの過程を経て、特殊限定的な「私」の視点は同時に一般性をも有するものとなっているのである。

ゆえに「私」は第二章の結末部で「焦点をもちはじめたことを感じ」た、「なぜこのような労働条件を耐えしのでいるのか？」という「自分の関心」に従って、第三章以下で弘済会女性販売員の現状についての特殊限定的な自分の見聞や実感を任意かつ具体的にレポートして行けばよいことになる。それだけで「私」のレポートは、引用した「白衣のピケ」のイメージから差異化され、「近代化」の観点から「封建的」と糾弾されるべき、「私」だけが知っている新事実を生々しく報告したものとして高い情報価値を持つことになるのだ。「私の文章は弘済会の総体のイメージをうかがいがらせるよりも、深夜の仮泊所で震えながら短い眠りをねむる娘たちの、狭く不確かな不満のイメージにみずからを限るべくつとめてきた」弘済会発行のパンフレットの公正より(中略)貧しく疲れた娘たちの偏見を、ルポルタージュエしてきた」と言う「私」は、このことに十分自覚的である。

この「私」の持つ差異化の機能がいかんなく発揮されるのが第三章と第四章である。ここでは「私」が面接した人物のうち第三章で「Aさん」、第四章で「Cさん」という販売員に専ら焦点が当たり、その証言が長く引かれ、その内容に「私」が解説を加えるというスタイルが取られている。^①この二人については実名は明かされず、な

ぜその証言を特に取り上げるのかも説明されないが、それぞれ「丸顔で健康そうで柔軟なび」（傍点原文）のあるアルトの声をもった娘さん」「戦後の中等教育が生んだ善き青年労働者、というイメージを満たしてくれる快活で素直な魅力をもった娘さん」と、「私」の視点からその印象が細かく述べられる。彼女らの証言は「二重山括弧で括られ、基本的に敬体で記述される。そこには「組合はよしてもいいのです」「というのよ」「だめだったのね」「さっぴかれたわ」など、その声をそのまま再現したかのような表現が混じり、また「父が戦死したため、私は高校を卒業しても就職できなくてとてモヒルになって一年遊んだのよ」という「Cさん」の人生上の告白が何気なく挿入されたりもする。このような「私」の視点の微視的な特殊限定性を強調する表現により、「私」の得た彼女らの証言は、偶然出会った匿名の個人との、しかし親密度の高い私的な場での会話で得られた、特定の立場に絡み取られぬ個人の本音として生々しい現実感を持つことになる。しかもそれは同時に「白衣のピケ」の「引用」によって一般性をも保証された「私」の視点を介していることで、単なる偶然的・個人的なものとして片づけられぬ、「近代化」という時代の正義から糾弾されるべき「封建的」事実を告発するものとして社会的意味を持つことになる。こうして彼女たちの姿と声は、専ら組織集団として表象され労組の「スケジュール闘争」と見られる向きもあつた「白衣のピケ」と差異化される。それは、組合という組織の政治的スローガンとしてではなく個人の切実な要望として「近代化」が遍在しているながら、組合に依拠できない個人が「近代化」を求めて公に声を上げることすらできぬ「封建的」現状に置か

れ続けるという、「白衣のピケ」よりも一層悲劇的な新事実としての強い印象を持つのである。

だがそのような新事実としての彼女らの姿と声、特殊限定的でありながら一般的であることを許された特権的な「私」を通じて任意に「描き出された」ものであることを忘れてはならない。ゆえに職場の「封建的」体質の温床となる歩合給制の良い点を述べてこれに迎合するかのような「Aさん」の証言は、「私」によって「小さなエゴイズム」と評されたまま深く追求されることがない。また「私」は「Cさんはこのモニシオン制度を格別気に入らないといったが、私は弘済会の国鉄や厚生省から横すべりした幹部の人たちに、私の考えるモニシオンを提出したいと思う。自己中心に物を考えずに、販売員の気持になって考えていただきたい」と、「Cさん」の証言の趣旨とは異なる自分の意見をあたかも「Cさん」の本音として事実化するような発言さえするのだ。

しかし、このように「描き出された」彼女らの証言は、限定的かつ一般的である「私」の地の文における解説によって、さらに改めてその内容を一般化されることになる。このような「私」の語りにおいて第三・四章では、従業員の間を阻む歩合給制と組合の機能不全が、弘済会の「封建的」体質の温床として浮上してくる。このうち状況をより総括的に説明する形となる組合の機能不全については、続く第五章において「せんさいな感じの正義派の青年」とされる「労組分会長」の証言によって解説が加えられ、さらにこれが「社会党青年部の快男児、深田肇氏」の証言によって裏打ちされることになる。

第五章に登場するこの二人の男性も、「私」によって生々しい現実感を帯びて描き出された人物である。「Aさん」「Cさん」と同じく彼らについてもまたその人となりの印象が「私」の視点から述べられ、その証言は二重山括弧で括られて敬体が用いられる。しかし「Aさん」「Cさん」と異なり、彼らの証言内容に「私」の解説はつかない。むしろ「私」は「娘たちは、みんな分會長を信頼し」あるいは「深田さんに信頼感をいだいた」と彼らの証言に全幅の信頼を寄せ、これに解説を加えることを意図的に放棄している。彼らの証言は解説の余地のない一般的權威を持つものとされるのだ。この彼らの証言に裏打ちされる形で、二人の女性の証言に対する「私」の解説は最終的にその妥当性を保証され事実化されることになる。この事実を踏まえて「私」は結末で次のように「近代化」を主張する。

「みんな弘済会をやめたがつています。弘済会の仕事に希望をもっています」

この暗い嘆きをもちながら過労にたえて国鉄のあらゆる駅えきのプラットフォームに働きつづけている若い娘にとっては、まず自分が幸福をそこなわれることなく働ける職場をつくりだすことが第一義の問題である。国鉄との血縁関係、五億の福祉事業、財団法人としての性格、そんなことはむしろ無関係な他人事とさえ感じられるだろう。このような性質のエゴイズムを私は日本の若い労働者のヒューマニズムだと考える。

これが「大阪の船場商人にも近代的な経営の嵐が吹きこんできた（中略）三月号の「鉄道弘済会の娘たち」を興味深く読みながら、私も置かれているこの大阪の実業界にちよつとメスを入れてみたくなったのである」と始まる次のような投書を誘発する。

「みんな弘済会をやめたがつています。弘済会の仕事に希望もっています」¹⁵と弘済会の娘たちはいつているが、船場で働いている従業員たちの心境はどうであろうか。（中略）ストも辞さぬ、という根性が新たに生まれていることを店主は銘記しておかなければならない。大江健三郎氏もいうように、まず自分が幸福をそこなわれることなく働ける職場をつくりだすことが第一義の問題であつてみれば、船場商人たる者は、過去のようなエゴイズムだけではすまされないと記憶すべきである。¹⁶

「白衣のピケ」によって象徴された「近代化」のイメージは、「娘たち」で限定による差異化を被ることにより、読者に船場の従業員の上に秘められた「ストも辞さぬ、という根性」を想像させるだけの、事実としての力を改めて持ったのである。このような「娘たち」における「近代化」イメージの流通により、「世界」執筆者として大江の主体が確立し、「革新的」論客として大江の登場が果たされるのである。

4 結論「近代化」と女性表象

ここで問題となるのは、「労組分会長」「深田肇氏」という男性の登場人物、視点人物「私」、「Aさん」「Cさん」という女性の登場人物の三者が、「私」の語りにおいて序列化されていることである。ここでは、その証言に解説の余地のない者として最上位を占めるのが男性登場人物であり、逆に「私」の解説を必要とする者として最下位を占めるのが女性登場人物であって、両者を媒介する位置を占めるのが限定的かつ一般的である「私」である。「私」は冒頭二章で販売員の労働環境を描く際「白衣のピケ」を引用することで一般性を獲得しつつ、第三・四章で一人称視点の限定性を際立たせ、「白衣のピケ」から差異化された新事実として「Aさん」「Cさん」を「描き出す」。さらにこれに自ら解説を加えてその一般化を図り、その解説を「労組分会長」「深田肇氏」の証言の一般的権威に裏打ちさせることで、「描き出された」彼女らの姿と声を事実化し、これに基づき彼女らに代わって「近代化」を主張する。

しかし、その主張は最終的には「私の目的は、ジャーナリズムや専門家たち、そしてゆくゆくは国会が鉄道弘済会について専門的な検討をはじめるところを提唱することである」というところに行き着く。「私」の主張する彼女らの「近代化」は、ジャーナリズム・専門家・国会が検討すべきものであり、彼女ら自身が主体的に検討し自ら獲得し得るものとはされないものである。彼女らを最終的に「私」として安全な、計算通りに「描き出された」ものとしてしまうこ

のルポの構造からすれば、これは当然の帰結と言えよう。つまり「娘たち」一編とは、彼女らを通じて「近代化」を唱えつつそこから彼女らの主体を排し、「近代化」獲得について無力な「女性」として彼女らを表象することで、彼女らの「近代化」に主導権を持つジャーナリズム・専門家・国会に連なる一般的権威のある「男性」の仲間入りを果たすという、「私」の成長過程だったと言える。実際「厳肅な網渡り」収録時に「娘たち」の「私」は「はく」となり、はつきり「男性」化するのでもある。

だがこのような形をとるからこそ「私」の主張する「近代化」は当時受け入れられたのだとも言える。そのことはそもそも、「娘たち」も引用した「白衣のピケ」という看護婦イメージが当時「近代化」の象徴とされ一世を風靡したということによく現れている。

病院スト報道の熱狂が去った後で看護婦の川島みどりは「今度のストライキで、「白衣の天使赤旗をふる」とか、「ナイ賃ガールの抵抗」とか、看護婦がその前面に押出されて、ある意味で看護婦のストとまでいわれている。たしかに、医療労働者の中では最も数も多く、しかも「白衣」がマスコミのよい宣伝材料になったのであろう」とこれを醒めた目で振り返っている。ここで改めて「白衣のピケ」「ない賃ガール」が、「白衣の天使」「ナイチンゲール」という従来の看護婦の「聖女」イメージを引きずったものであったことに気づかされる。実際「白衣のピケ」写真が読・毎朝各紙上から目立って減少する六〇年一二月になって、「朝日」同月一日の「看護婦になるには」が戴帽式に臨む看護学生の写真を掲げ、「清潔な白衣を着て、医師の手伝いをしたり患者のお世話をしたりする仕事は、

たしかに女性の天職といつていいでしょう」と述べていることは象徴的であろう。結局「白衣のピケ」を掲げてマスコミが唱えた「近代化」とは、看護婦の労働者もしくは専門技術者としての主体確立を目指すというよりも、その「天職」としての「女性」性が「封建的」な「ナイチンゲール精神」押しつけによって破壊されないことを目指したという側面を払拭し切れないものだった。この論理からすれば、たとえ職場が「近代化」したとしても、むしろそのことによって看護婦は「女性」として困り込まれ、「近代化」を支える二流の労働力として搾取され続けねばならないことになる。このように当時の「近代化」には、女性を疎外した「男性」中心主義的な側面があったと言わねばならない。

「娘たち」の女性表象もまたこのような「近代化」の論理に則るものだった。それはまた、「未来像」に基づき「現実・他者をえがきだす」という大江の「リアリズム」が、「白衣のピケ」の「引用」によって「近代化」という時代の正義を「未来像」と据えたことにより、その「演繹的」性格を保持したままこれが当時の男性中心主義的言説状況に組み込まれ社会化するという形で実現したということでもある。大江の「革新的」論客としての主体確立をもたらした「娘たち」における一つの文学的方法の実現が、このような「近代化」と女性表象の関係性の論理に基づいていること。その「娘たち」が大江において長く意味を持ったこと。ここに、大江テクスト全体を見直す契機があるものと思われる。

注(1) 「三田文学」一九五九年一〇月号

(2) 「世界」一九六六年九・一〇・一二月・一九六七年九・一〇月号。

(3) 「世界」一九六九年三・八・一〇月〜一九七〇年一月・三月六月号。一九七〇年九月岩波書店刊(岩波新書)。

(4) 「世界」一九七三年一月〜一九七四年一月号。七四年九月岩波書店刊。

(5) 日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典』第五卷(一九七七年一月講談社刊)の「世界」の項。中野好夫執筆。

(6) 『毎日年鑑』一九六二年版(一九六一年一月・毎日新聞社刊)より。

(7) 「毎日新聞」一九六〇年一月四日「社説 病院スト解決のために」及び「朝日新聞」同月六日「社説 病院ストの底にあるもの」。

(8) 「そういうところでは、看護婦は「仕事を覚えるため」というので徒弟制度みたいな労働条件にしばりつけられている。そうでないところも、個人病院などは免状をとるまでは家事手伝いをやらせているし、無給医師の代診もいる◆このような前近代的制度にしばりつけておくために「ナイチンゲール精神」を要求されたのでは、看護婦さんでなくとも「ナイチンゲールはいやだ」と叫びたくもなるだろう。給料がやすい。最低八千二百円。これは病院の経営者も認めている」「読売新聞」一九六〇年一月七日「編集手帳」など。

(9) 「朝日新聞」一九六〇年一月八日夕刊「病院スト、第二波入り」。類似の表現として「ない賃ゲル」(「朝日新聞」六〇年一月二日「天声人語」、読売新聞「同八日夕刊」)「ストuppした外来五千人」及び同二八日「病院スト背景と波紋」(「低賃ゲル」)「朝日新聞」同日「天声人語」(「ナイチンガール」)「サンデー毎日」同月二〇日号「天使たちの人間宣言」(「無賃ゲル(ナイチンゲルと読むらしい)」)「週刊朝日」同月二〇日号「白衣の天使」というけれど」がある。

(10) この段落の議論は東京大学教養学部後期課程言語情報科学分科二〇〇年度冬学期「メディア・コミュニケーション論Ⅱ」の講義において小森陽一氏が夏目漱石『文学論』を例証に提唱された「パロディとしてのリアリティ」という概念から着想した。小森氏は近刊予定の自著にてこれを発表されるご予定とのことであった。なおこの引用については小森氏よりご承諾をいただいた。この場を借りて改めて小森氏のご厚意に御礼申し上げる。

(11) ここでの作中人物の証言内容に対する「ほく」の解説という概念は、宮崎靖士氏が口頭発表「小説における方言(翻訳)」——太宰治「思ひ出」、井伏鱒二「言葉について」——(二〇〇〇年度昭和文学会第二十七回研究集会・二〇〇〇年一月九日於大東文化会館)で指摘された、井伏鱒二「言葉について」における作中人物の言葉の作中「私」による「訳述」という《翻訳》の存在から着想した。この引用については宮崎氏よりご承諾をいただいた。この場を借りて改めて宮崎氏

のご厚意に御礼申し上げます。なお氏はこれを「太宰治「思ひ出」の方言記述をめぐって——小説における方言(翻訳)——」(「国語国文研究」第一一九号 二〇〇一年九月)及び「井伏鱒二「言葉について」の「訳述」をめぐって——小説における方言(翻訳)——」(「昭和文学研究」第四四集 二〇〇二年三月)の二本の論文にまとめられた。

(12) ここでの「声」の表象に関する議論は小森陽一『日本語の近代』(二〇〇〇年八月・岩波書店刊)第六章「植民地の領有と日本近代文学の成立」より着想した。氏はここで「金色夜叉」の冒頭部を引き、「地の文から、かき括弧と改行で分離」された「科白」の部分が、実際に発話された声を再現する過剰な身振りを示していることが、最も鮮明にあらわれているのは、言説の性差、とくに発話の冒頭や末尾におけるジェンダー指標が強調されているところである」と指摘している。

(13) 「朝日新聞」一九六〇年一月六日「社説 病院ストの底にあるもの」及び「毎日新聞」同月五日「病院ストの背景」。「厳肅な綱渡り」収録のものは「考えるものである」となっている。

(15) 丸山実(兵庫・会社員・四七歳)「そろばん片手に」(「世界」一九六一年四月号)

(16) 「病院スト——看護婦の立場から——」(「世界」一九六一年三月号)

(17) ジャネット・マフ「イメージと理想 看護の社会化と性差

別について」は「ほとんどの看護婦は女性だ。看護婦をめぐる諸問題は、女性問題でもある」とした上で、「メディアが看護婦について描きだすステレオタイプのイメージ」の一つとして「慈愛の天使」をあげている（アン・ハドソン・ジョーンズ編著、中島憲子監訳『看護婦はどう見られてきたか 歴史、芸術、文学におけるイメージ』。一九九七年七月時空出版刊所収）。

(18) 一九六〇年二月から「娘たち」が発表される六一一年二月（同月に「世界」同年三月号が発売）までの読・毎・朝各紙面に散見される看護婦の写真の内はつきり「白衣のピケ」写真と断定できるものは「読売」「朝日」各六〇年二月一日夕刊と「読売」六一一年一月六日夕刊の三例のみである。

(19) 橋岡剛子「戦後の看護労働運動が示したもの——全国病院統一スト・全国夜勤制限闘争を中心に——」はこの時期の病院ストについて「賃金面では一定の成果をあげるとともに、病院労働者の権利意識を目覚めさせるうえで大きな役割を果たしたといえる。しかしながら、病院労働者としての看護婦の労働条件改善については、大きな成果をあげることができなかった」と評し、病院スト後「看護婦が不足するなかにあつて、医療の近代化、施設の肥大化はますます進み、一方では看護労働に対するいっそうの締め付けが始まっていた」とを指摘した上で、一九六八年に「一九六〇年の全国病院ストをしのぐ大闘争」として全国夜勤制限闘争が起こったことを述べている（日本看護歴史学会編集・一九九八年三月メヂ

カルフレンド社刊『検証——戦後看護の五〇年』所収。

* 参考文献

G・C・スピヴァク著、上村忠男訳『サバルタンは語ることできるか』（一九九八年二月みすず書房刊）
イヴ・K・セジウィック著、上原早苗・亀澤美由紀訳『男同士の絆 イギリス文学とホモソシヤルな欲望』（二〇〇一年二月名古屋大学出版会刊）